

### 35 《聖マタイの召命》を正しく読み取る方法

2020  
真鍋友範

私たちは通常先入観にしっかり捕われながら外周世界を見ている。

この先入観とは、一種の“カン”というものであり、個人が過去の経験から永遠と培ってきた経験則に基づいて判断される。

突然目前において外部刺激による判断を求められた場合、脳内ではその答えを生む諸活動が生じている筈だ。

多くの経験の蓄積は、個人のとっさの判断場面に於いて極めて有効に作用する場合が多い。

例えば、ステージ上で展開する演劇鑑賞の場面で、主役級俳優は、最も目立つ衣装で、目立つ行動をとり、その場の場面進行の中心だ。従って当たり前のようにステージ上ではよく目立つのだ。

仮にステージに向かって主役級人物が現れたなら、その主役級人物の登場直後に放った言葉が次の物語の展開に対し、直後の他の登場人物の動作に作用する事も多いだろう。

また、現代の日常の場面において、師匠に弟子入りする漫才の若手は、師匠よりもずっと若いことがあたりまえだ。芸の継承と言う意味でも、それが当たり前の世界だ。

人を呼び出す時、対象人物を特定する為に行う身体動作は、《指差す》という動作だ。これが最も正確であり、通常身体動作であることに疑いはないのだ。

しかも、呼び出す目的で現れた人物に期待される次の動作は、名前を呼ぶことだが、その場面を絵に移し替えて表現するなら、《指差す》しか他に方法はないと考えるだろう。

仮に、呼び出す予定の相手の座った姿を窓越しに見つけていたなら、入り口に迂回してドアを空けたとき、まだそのまま座っている姿の相手を探そうとするだろうが、期待に反して、相手は次の行動に移っていて座った姿ではないこともあるだろう。でもまずは、座った姿の人物の中に先ほどの対象人物が居ると判断するだろう。

つまり、あらゆる場面で、先入観が働くのだ。

さて、ここに17世紀初頭のローマで活躍した画家カラヴァッジョの作品《聖マタイの召命》がある。



《聖マタイの召命》1600 カラヴァッジョ

では、ここでクイズ。イエスの呼び出している12人の弟子のひとりマタイはどの人物だろう。

まず、多く人は細かな部分は大抵の場合無視する。まずは大まかに見て判断するのだ。

例えば、【髯の男の人差し指】や、【イエスの右手の力ない人差し指】には注目するが、【髯の男の親指】や、【イエスの右足】や【イエスの左手】については見ようとしない。

実はこの鑑賞法により、多くの場合判断を誤る。

この二つの要素から生まれる画面のストーリーは、【イエスがよくわからない動作でマタイを呼び出したから、聞かれたマタイは、『呼んでいるのは私ですか』

と聞き返している、というストーリーとなるのだ。

髭の男の指先が自分自身に向けられていないのに、【自分を指差している】、と主張するのは【無理なこじつけ】に他ならない。

次に多いストーリーは、【上記同様に描写内容をよく見ない判断】だが、幾分細かく見ている。それでも一部しか見ていない。

具体的には、【イエスの人差し指は曲がっていて、より下方の人物を指差している】とか、【髭の男の指は、横に座る若い男を指差している】という誤判断だ。

上記のストーリーを支持する人は、【聖マタイは若い俯いた収税史】だと信じている人たちだ。

でも、多くの【先入観】が、ここでも判断を誤らせるのだ。

- (1) まず、イエスも髭の男も、両者が単純に【指差し動作】であるという先入観だ。

確かに【髭の男の指先の示す方向は、よく見ると、横の人物である】点は認めますが、決して【ななめ45度前の方角の人物】ではないのだ。

【遠近法で描かれる場合の指の描かれ方ではない】のだ。指が短く描かれてないので、【横の人物】なのだ。

過去には『若い俯いた収税史のように見える』、と述べている、かなり強引な説得のない解説文も存在する。

この解説だと、カラヴァッジョのデッサンが下手な為、正確に描くことができなかつたことになり、彼の才能を侮辱しているのと同じとなる。

つまり、【若い俯いた収税史】を聖マタイとして解説しているのだが、  
絵画内容の判断としては、描かれているデッサンと矛盾し、同意できない内容なのだ。

また、【イエスの指先は確かに不自然に曲がっている】。その為に、ここでも先入観が生じる。

イエスはこの収税所に、【マタイを呼び出しに現れたのだから、指差すに決まっているという先入観】だ。

これも先入観の成せる罫だ。

イエスは、【二者択一の質問】を髭の男から受けたのだが、【元の立ち位置では目指す眼鏡の男の顔が、髭の男の顔と重なる為、右足を一步左側に踏み出して、視点の位置を、顔の見える位置に変更している】。

ここに描かれたイエスは、【指差している動作では無く、垂直方向に腕を廻し、向こう側を示す動作】なのだ。イエスと同じ動作をすれば、【指先に力がこもらない場合は、手首が折れて少し指が下に向く】という特性も理解できる。これは人種にかかわらず、誰が行っても生じる身体特徴なのだ。

(2) 【髭の男の親指】を見逃すと、ストーリーそのものを読み間違えるのだ。

髭の男は、イエスに向かって、二者択一の質問を投げかけている。

『お探しの人は、私ですか、それとも隣の人ですか』が、正解だ。  
これまでの解説文は全てここを見逃している。

つまり、立てられた親指の意味は、『私ですか』という意味なのだ。

これも動作を真似て見ればわかる。【描かれているのは、親指を胸に当て、続いて人差し指を横に向ける連続動作】なのだ。しかし、これに気付かない人は結構多い。髭の男について、大きい画像での確認が必要だ。

(3) 【イエスの右足】も見逃してはいけない動作だ。

ここでの誤判断は、【イエスはここから離れ、もう帰ろうとしている】、というものだ。このような誤った解説文を過去に見受けた。

まず、なんと不思議な動作かと訝るべきだ。【呼び出そうとする人物が、目先のテーブルに居るはずなのに、なぜイエスはそちら側に接近しないのか】と。

【この場面を鳥瞰図として上から眺めると、イエスの元の立ち位置からは、眼鏡の男の顔が髭の男の顔と重なっていてよく見えないのだ。】

正しくは、【イエスは、聖マタイの顔をしっかりと見ようとして、右足を

一步だけ横に踏み出したのだ。】

これ以上歩き出すと横にいるペテロにぶつかってしまうので、帰ろうとして歩き出したのではないことは確かだ。

- (4) 【左手の開いた手のひら】も、さりげなく描かれているが、メッセージを伴う重要な身体動作だ。

【イエスの手の平は、質問した髭の男に向けられている。】

この身体動作は、髭の男からの質問への【受容の意味】だ。つまり【答えよう】というイエスの意思表示なのだ。

カラヴァッジョは、無駄なものなど一際描いていないのだ。しかしながら、最初に髭の男やイエスは互いに【指差している】と先入観で判断すると、これらの重要な身体動作と、それに伴うメッセージや全体的ストーリーは闇の中なのだ。

我々は絵画を見るとき、自己経験に基づいた主観的先入観で見えるものだ。この絵画に関連していくつかを例示しよう。

- ① 【スター級の人物は、画面の中央の目立つ位置にいて、よくわかるよう周囲より立派に描かれるものだ。】という先入観

確かに宝塚のスターならそのような画面構成で描かれるのだろう。しかしカラヴァッジョは変わり者で、そのような定石を嫌うのだ。

およそ主人公を脇役の後ろに配置する画家は、そのセンスを疑われる。でもカラヴァッジョは、それをやってのけた。

観衆は目立つ位置にいる人物が重要な人物であると考えてしまう。中央の髭の男や、画面左手の椅子に座る若い収税吏は観衆の立つ位置からは目立つのだ。だから、先入観からスター級の重要人物であると誤った判断してしまうのだ。

- ② 【弟子は師匠より若い】という先入観

そうではないことの反証として相応しいのは、レオナルドの描いた

《最後の晚餐》だろう。見てわかる通りだが、大多数の弟子はイエスより明らかに年寄りだ。当時は弟子が師匠より絵若いという常識はなく、描かれた人物が弟子として若くなくても全く関係なかったのだ。現代人はそれに気づかない。

- ③ 聖書に《イエスは収税所に座っているマタイを御覧になった》とあるのだから、【マタイは座っている人物である】という先入感

時間は止まっていないもの。常に流れている。

確かにイエスは座っているマタイを収税所の窓越しに見たようだが、収税業務は続行していた。

イエス達一行が収税所の入り口ドアから入るまでの時間に、収税業務は収税金授受という段階に達し、マタイは眼鏡を手に取り、片手を机に突きながら、机に寄りかかり、上体を乗り出して若い収税吏の業務を監督していた。そこにイエスたち一行が現れたのが、この場面のスタート地点になるのだ。

つまり、【マタイはもう座っていた段階から移行して、机に寄りかかっているのだ。】つまり【立っていない】のだ。

カラヴァッジョは、マタイは座っているという【先入観】を見事に排斥した表現を行いながら、同時に聖書の記述にも矛盾しない、絶妙なリアリズム表現を実現している。

カラヴァッジョのリアリズムを讃えるのなら、【観衆がこの部分に気付かなければ、その本質を理解していないことになる】だろう。

以上、カラヴァッジョの仕掛けた【先入観のトラップ】を乗り越えて初めて、この作品のストーリーが正確に伝わるのだ。

カラヴァッジョのリアリズムを知るには、表面的に描かれた情景を眺めるだけでは足りない。

作品を理解することに必要な【先入観の排除】とともに、【ストーリーの正確な読み取り】と【時間の流れによる動画表現への理解】を必要とする高度な作品理解が必ず必要なのだ。

